

卷頭インタビュー

気象変化の真相は依然ナゾ

——地球温暖化の不安を吹き飛ばすような厳冬ですね。これも異常気象?

住 気象はゆらぐのですよ。長期的には地球は暖まっている、という判断は正しい。今回は昨年十一月下旬から起きた北極寒気団の南下を兆候段階でつかめなかつた。

——「北極振動」というのだそうですが、それは何ですか。

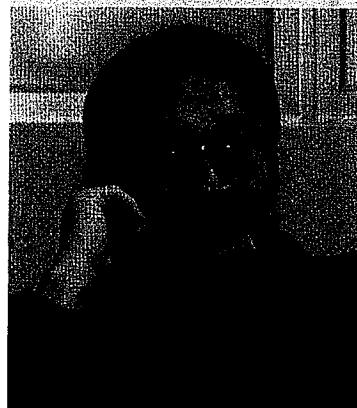
住 北極にたまつてゐる高気圧の、つまり冷たく重い空気の大きな塊が南へと流れ出す。代わりに南の暖かい空気が北極に入り込む。そういう空気の出入りのこと。だから、今冬の北極は「温暖化」ですね。

InteRView

住 明正

(東京大学気候システム
研究センター教授)

1948年岐阜市生まれ。東大大学院理学研究科修士課程修了。気象庁予報部、ハーバード大学気象学教室助手などを経て85年、東大理学部助教授、91年より現職。理学博士。著書に「地球温暖化の真実」など。98年日本気象学会藤原賞受賞。



の暴威……やはり異常気象ではないですか。

——お話を聞きますと、温暖化をあまり心配しても仕方がないような……。

住 それは違うでしょう。温暖化そ

に一度くらいしかない常ならぬ天候といふのが定義です。だが、それも自然かなりの確度で予報できます。

——一方で台風、豪雨など夏場の気象変化はよく当たります。

——温暖化の影響ではないのですか。

住 異常気象といふのは大体三十年

のものは自然現象ですから、人類社会が絶滅しても良いのならかまいません。これは、気象学の問題よりも人間の生き方、社会のあり方を考える問題です。

地球は今、明らかにオーバーキャパシティです。人間は地球のあらゆる資源を酷使している。地球と人間社会が持続的に共存できるような全体のデザインが大事なのです。先進国の人間社会のように、やれグルメだ、それクルマだと贅沢を求めるのが人間の本来の生き方なのかも考えるべき時だと思います。

——気象学者からそんな話をうかがうとは思いませんでした。

住 いや、研究者も研究する前に一

人に大気温度は暖まりつつある。大気中のCO₂は産業革命以前に比べ約一・五倍になつていて。平均値で〇・六度ほど上がつたのでしょうか。しかし、これが気候の変化に決定的な影響を及ぼし始めたという証拠はありません。

私はフリーターの生き方に注目しています。あくせく働かない。少ないカネで充実して生きていく。自然の摂理

もないので、「自然ですら将来の天気を知っているわけではない」かもしれない。まあ「一週間前」だつたら、かなりの確度で予報できます。

——一方で台風、豪雨など夏場の気象変化はよく当たります。

——温暖化の影響ではないのですか。

住 気象学の近年の一番の進歩は工芸社会的影響が甚大ではないですか。

住 現在の予報技術では、三ヶ月前に北極気団の動きなどの大気循環の力、オスをつかむのは困難です。スーパー・コンピューターが登場し数値モデルが大きく進歩した今でも、まだわからなることは多い。こう言つてはミもフタ

の猛暑、昨年のアメリカのハリケーン

——それについても、一昨年夏の日本

——それについても、一昨年夏の日本